〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起ー小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子ー

第十三節　『青い鳥』と及川道子（第二年十二月献身と熱況）

築地第二年の師走には先年に続いて〈子どもの日〉は企画され、メーテルリンクの著名な戯曲が提供された。変化に富み、争闘の場をも含むこの童話劇には、『そら豆の煮えるまで』で好評を得た及川道子が、同じく主役の少年に抜擢される。長期の公演が十一日から十七日間行われ、熱狂的な称讃を博した。

隣家で病む少女を救う療法として、幸福へ導く青い鳥を探すよう依頼された兄妹、チルチルとミチルは光の精に導かれ、クリスマスの夜はるか遠くへと旅立った。かくて探訪する未知の世界、すなわち亡き祖父母の住む思い出の国、樹木や獣類の精が宿る深い森、安楽と贅沢に満たされた幸福の国、未来に生まれる子どもたちの王国において、ふたりははたして幸福の鳥を得られるであろうか。

メーテルリンク作・楠山正雄訳『青い鳥』

第一幕　木樵（きこり）の小屋

幕が上がりますと、兄のチルチルと妹のミチルとが小さな寝台の上ですやすや寝入っています。・・・やがて二人の子供は眼を醒ましたと見えて、床の上に起き上がりました。

チルチル　ミチルかい。

ミチル　ええ。にいさん。

チルチル　眠ってるの、お前。

ミチル　にいさんは。

チルチル　ううん、眠ってはいないさ、お話ししているんだもの。

ミチル　ねえ、きょうはクリスマスなの。

チルチル　ううん、まださ、明日だよ。でもクリスマスのおじいさんは、今年はなんにも僕たちには持って来てくれないんだって。・・・

こんなことを言っている時、ふと小屋の入口の戸をコツコツ叩く音がしました。半分戸が開くと、そこへ緑色の着物をかぶった小さなおばあさんが入って来ました。・・・杖にすがってよぼよぼ腰を曲げて歩いていました。見たばかりでそれは妖女に違いありませんでした。

妖女　歌を歌う草か、羽の青い鳥はないかね。

チルチル　うちには草はあるけれど、歌は歌わないよ。

ミチル　にいさんは鳥は持っていてよ。

チルチル　でもあれは上げられないや。・・・

妖女　（眼鏡をかけて鳥をながめながら）この鳥は駄目だよ。ほんとに青くないからね。お前達たちはこれから行って、わたしの欲しいその鳥を探して来ておくれでないか。

チルチル　でもどこにいるか、僕知らないもの。

妖女　それは私だって知りはしない。それだから探して来て貰いたいのさ。歌を歌う草のほうは、いますぐ無くてもまあ済むが、青い鳥だけは是非とも欲しいのだから。大変患っているわたしの小さい娘のために要るのだから。

チルチル　その娘さんはどうしたの。

妖女　よくは分からないがね。つまり娘は幸福になりたいのさ。・・・

第五幕　森

ある森の中。夜。月が照っています。・・・そこへ猫がでて来ました。

猫　（ぐるっとひとつひとつ樹にお辞儀をして）皆さん、今晩は。

樹の葉のささやき　今晩は

猫　今日という今日は大変な日ですよ。いよいよわたし達の敵がやって来て、皆さんの精を抜きとって、それを改めて自分の手で皆さんに渡そうと云うのです。敵というのは、これまでさんざんあなた方をひどい目にあわした木樵の息子のチルチルです。その子は、あなた方が世界の初めから人間に隠して持っている青い鳥をさがしているのです。・・・その子は青い鳥を吾々の手から取り上げることが出来るんです。そうなれば吾々は否応なしに人間の自由になるんです。・・・獣たちにも知らせないといけませんね。兎が太鼓を持っていましたね。なに、ここに来

ていますか。じゃあ、すぐに太鼓を叩いて招集してもらいましょう。さあ、みんなやって来ました。

兎の招集の太鼓が聞えて、だんだん遠くなって行きました。ーチルチルとミチルと犬が入ってきました。

猫　（子供たちを迎えに飛んで行って、へつらうような、甘たるい、熱誠らしい調子で）おや、いらっしゃいまし、坊っちゃん。今晩はなんといういい御機嫌で活発なご様子に見えるでしょう。わたしあなたのお出でをみんなに知らせておこうと思って、ひと足お先にまいりましたのですよ。なにもかも好都合にまいりました。今夜はきっと青い鳥がきっとお手に入りますでしょう。・・・

樫の樹がのそのそ出て来ました。嘘のように年を取っていて、寄生木の冠を頭にかぶり、長い苔で淵をとった緑色のガウンを着ていました。盲目で白い髯は風に吹かれていました。青い鳥がその肩の上に止まっていました。・・・

チルチル　やあ、あの人、青い鳥をもっている。早く早く、さあ、ここへ。それを僕にください。

樹たち　静かに

猫　（チルチルに）帽子を取りなさい。樫の大王です。

樫　（チルチルに）お前は誰だね。

チルチル　僕、チルチルと言います。青い鳥はいつ頂けるでしょうか。

樫　チルチルと。木樵の息子だな。

チルチル　そうです。

樫　お前のおやじは我々に沢山悪い事をした。わしの一家だけで数えても、息子が六百、小父と小母が四百六五、甥と姪が千二百、嫁が三百八十、曾孫が一万二千も殺された。

チルチル　僕、ちっともそんなこと知らないんです。おとうさんもつい為たんです。・・・

樫　わしはお前が青い鳥を探していることを知っている。それはつまり万物と幸福の大秘密を探りだして、人間がこの上にも残酷に我々を追い使おうというのだ。

チルチル　いいえ、いいえ。そうじゃないんです。妖女のベリリウンヌの小さい女の子が大変悪いものですから。・・・

樫　このとおり年は寄って、跛で体は利かんし、目も見えないが、わしは一人で先祖代々の怨敵に向かって行く。子供はどこにいる。

こう云って樫の大王は杖の先で探りながら、チルチルのほうへ近づこうとしました。

チルチル　（隠しからナイフを出して）あの老いぼれが大きな杖を振りまわしてくるのは、僕に向かう気なんだ。

樹たち一同　ナイフです。お気をつけなさい。ナイフです。・・・

樫　なんだ。みんなそこにいるのだな。よし勝手にしろ。獣たちのうちだれかに加勢してもらおう。

野牛　よし来た。おれが引き受けよう。この角でひと突きだ。・・・

豚　（熊と狼に）みんな一緒にかかろうよ。わしはうしろかわ加勢しよう。二人を叩き倒して、女の子が斃れたら分けて食べよう。

狼　君たちは前からかかれ、おれはぐるぐるまわりをやってやる。

チルチル　（片膝で起き上がって、一生懸命ナイフを振り回しながら、悲鳴をあげている妹をかばって闘いました。けれどだんだん疲れて危くなった様子をみると、獣も樹ものこらず集ってきて、打ち倒そうとしました）・・・もうとても防ぎきれない。あんまり大勢なんだもの。熊だ、豚だ、驢馬だ、樅だ、欅だ。・・・僕もうだめだ。糸杉のやつ、うんと頭を殴りゃがった。

第五幕　目覚め

初めの幕と同じ飾り付けの部屋。奥の右手の方にチルチルとミチルとが、小さな寝台の上にぐっすり寝ていました。・・・となりの家のベルレンゴーのおばさんが入って来ました。初めの幕に出た妖女によく似た小さなおばあさんで、杖にすがっていました。

隣のおばさん　お早う。どなたもクリスマス、お目出とう。

チルチル　やあ、妖女のベリリウンスだ。

隣のおばさん　クリスマスのシチウをこしらへようと思ってね。火種を少し頂きに参りました。今朝はお寒いことですね。子供さんたち、お早う。御機嫌はいかがが。

チルチル　ベリリウンスのおばさん、僕とうとう青い鳥が見つからなかったよ。

隣のおばさん　なにをいっていなさるんだね、この子は。・・・

かあさん　それはそうと、娘さんはどんなお塩梅ですね。

隣のおばさん　まあまあでございますよ。起き上がることができませんのでねえ。お医者様は神経だって仰しゃるですがねえ、わたしがなによりいいだろうと思うのは、今朝もあれがクリスマスの贈物をねだりましてねえ。まあ、あの子の考えですと。

かあさん　ええ、ええ、わかりました。チルチルの鳥でしょう。これチルチルや、お前どうしてもあれを可哀そうな娘さんに上げないかい。

チルチル　なに、かあさん。

かあさん　お前の鳥さ。あれはお前には要らないのだから。今では見てもやらないのだろう。それなのに娘さんは長い間あれを欲しがって、死にかけていなさるのだからね。

チルチル　おやそうだ、僕の鳥はどうしたろう。ああ、あそこに籠があるよ。ミチル、あの籠をごらんな。・・・おやおやまあ、この鳥は青いよ。でもあれは僕の雉鳩だ。でも出て行く前よりかずっと青くなってらあ。なんだ、あれが僕たちの探していた青い鳥なんだ。僕たち随分遠方まで探しに行ったけれど、本当はここにしょっちゅういたんだな。ミチル、お前鳥を見たかい。・・・僕籠を降してやろう。（椅子の上にのって鳥籠を降して、それを隣のおばさんの前へ持って行きました。）さあ、ベルレンゴーのおばさん、これです。まだほんとに青くはないんですけれど、今にだんだん青くなりますよ。早く娘さんの処へ持って行っておやんなさい。

隣のおばさん　まあそう。本当に下さるの。さうやってすぐと、ただ貰っていいかしら。ありがとう。あの子がどんなに喜ぶでしょう。（チルチルを接吻しながら）キスをさせて貰いますよ。では早速に、早速に。・・・

さっき来た隣のおばさんが、片手に可哀らしい、それはびっくりするほど美しい娘を連れて出て来ました。娘はチルチルの雉鳩をしっかり抱えていました。

隣のおばさん　この通り、奇蹟を見て下さい。

かあさん　まあおどろいた。歩けるの。

隣のおばさん　歩けるかって。どうして、駈けることでも、踊りをおどることでも、飛ぶことでもなんでもできますよ。この子は鳥を見ますとね、明るいところでチルチルさんの雉鳩かどうだか見るんだって、あんな風に一ツとびに窓の所へ飛んで行きましたよ、それからというものはまどうもねえ。天使のように往来へ飛んで行ってしまって、一緒に歩くのに骨が折れる位でございましたよ。①

『青い鳥』歴代の配役

劇団	民衆座	舞台協会	第二芸術座	築地小劇場
公演年	大正九年	大正十一年	大正十三年	大正十四年
チルチル	水谷八重子	岡田嘉子	水谷八重子	及川道子

① メーテルリンク作『青い鳥』（楠山正雄訳『近代劇選集（一）』新潮社、一九二〇年。四五五ー四五六、四六二ー四六三、五三〇ー五三二、五三七ー五三八、五四七ー五五〇、六三五ー六四二頁。

ミチル	夏川静江	夏川静江	川村匡章
かあさんのチル	柳とし子		谷崎竜子
とうさんのチル	奥村博史		丸山定夫
妖女	園村咲子		東山千栄子
パン	港武者之輔		青山杉作
火	岡本一郎		伊達信
水	天草浪子		細川和歌子
砂糖	根津新		滝沢修
犬	友田恭助	松井きよみ	友田恭助
猫	永井俊治	根本淳	伏見直江
光	東（吾妻）光子	金平軍之助	山本安英
おばあさんのチル	波川千早		松岡筆子
おじいさんのチル	奥村博史		丸山定夫
夜	松島須恵子		東山千栄子
樫	御橋公		千田是也
楡	久保田信一		生方賢一郎
菩提樹	内田纂太郎		藤輪和正
樅	重田一		薄田研二

ポプラ	根津信		滝沢修
豚	佐藤渡		島田敬一
野牛	伊藤真吾		小杉義男
馬	岡本一郎		上田清二郎
時	港武者之輔		汐見洋
隣のおばあさん	園村咲子		東山千栄子
演出	畑中蓼坡	伊藤松雄	小山内薫・青山杉作・土方与志
音楽	山田耕筰	水谷竹紫	佐久間毅
舞踊振付	石井漠		石井漠　①

メーテルリンクの代表作『青い鳥』は、畑中蓼波が主宰する民衆座（新劇協会）により大正九年有楽座において初演された。当時十四歳の水谷八重子をチルチル、十歳の夏川静江をミチルとし、畑中の演出によるこの企画

① 秋庭太郎著『日本新劇史』下巻、三四九頁。
水品春樹著『新劇去来ー築地小劇場史』一四三ー一四四頁。

は、西洋童話劇の受容として「わが新劇史上記録さるべき芝居」と評価される。① 小山内薫も『青い鳥』の初演を称讃し、同年なされたその劇評がいくつかの演劇史に引証される。

「『青い鳥』を見て―大正九年二月有楽座」（『小山内薫全集』第七巻）

有楽座で最終の晩に『青い鳥』を見た。

序幕の樵夫の家から二幕目第一場妖婆の御殿まで見たところでは、遠慮のないところ、こいつ大分悩まれそうだとおもったが、その次の思い出の国へくると、すっかり見直した。夜の宮はちと不感服だったが、森へ来るとまた大いに見直した。墓地も好かった。未来の国は更に気に入った。それからもう終いまでずっと愉快に見た。すっかり見てしまうと、まえの樵夫の家や妖婆の御殿までがそう悪くなかったように思われてきた。・・・

私は本当に愉快に見た。いま家へ帰って回想してみても愉快である。近頃こんなに愉快な明るい気持で芝居を見た事はない。勿論冷たい批評の目をむけたら、欠点や手落ちや技芸の拙なさはいくらでも挙げることができよう。またそれをするに、私ほど適当な者が他にあろうか。私はある意味に於いてそれほど自負して

① 秋庭太郎著『日本新劇史』上巻、四三一頁。
水谷八重子著『女優一代』二一―二三頁。
〔参照〕本稿第三節　新劇の勃興と震災前夜の新劇人　その二

いる。その高慢な私がこれほど愉快な感じをもって帰る事ができたのだ。私はそれだけでも民衆座に敬礼の帽子を脱いでも好いと思っている。

私はこの芝居の、世界で最も良い演出を見て来ている。それは言うまでもなく、モスクワの美術座のだ。それから伯林でラインハルト独逸座のも見た。しかし、露西亜のを見た目では、いささかも比較にならなかった。前者が詞通りにしっとりとしたものであったから、後者は詞通りにがさがさしたものであった。後者がマアテルリンクの趣向の皮膚のみを見たものであったから、後者は趣向の奥に詩人の魂を見たものであった。英吉利のや亜米利加のは写真で見たばかりだが、ラインハルトにさえ劣っていた事は分かっている。なぜと言えば、美術座からわざわざ舞台監督を呼び迎えた巴里の演出でさえ、露西亜人に言わせると「だめだった」そうである。・・・

日本で『青い鳥』を演る。すでにこの事だけが記録ものである。日本で『青い鳥』を演った。すでにこの事だけで民衆座は、豪い仕事をしたのである。この事は少しでも舞台というもので苦労したことない人間には、理解し難い事であるかもしれない。しかもこれは事実である。牢乎として抜くべからざる事実である。・・・なかでも思い出の国と森と墓地と、ほとんど非のうちようのない立派な舞台を見せてくれた。明かりの使い方は、そのなかでも森が一番良かった。この場は私が見た時、露西亜でも独逸でも抜かれていたので、ことに清新な感じを受ける事ができた。・・・

役者についてはあまり多くを言いたくない。なぜと言えば、みんな上手ではなかったからである。しかし同時に、みんな熱心で真面目だったからである。でも、水谷八重子のチルチルなどは立派なものだった。夏川静江のミチルも、私は可愛くて仕方がなかった。子どもは一体にみんなよかった。だから未来の国が私に

は一番面白かった。殊にやがてチルチルの弟妹になるべき子供をやった子が無邪気で、はっきりしていて気に入った。奥村博史君の父さんのチル、おじいさんのチルも厭なところが少しもなくてよかった。犬と猫はなかでも大役だが、友田君、永井君の二人も一所懸命にやっていたのがよかった。ただ、厭みは猫の方に少しあった。しかしこれはある方が好いかも知れない。砂糖君も私には気に入った。モスクワではこの砂糖をやった青年と一番仲好く話をしたので、なお思い出が深い。樫の御橋君も、パンの港君も前途のある人だと思った。港君の舞台は昨年谷崎君の『十五夜』で一度見た事があったが、その時の芸より今度の芸の方を純だと思った。火の岡本君も、台詞のない間の体に難があったが、台詞のある間は悪くなかった。

ただ、いつも言うことであるが、悩まされたのは女優だった。光をやった吾妻君の他には、ひとりも標準語のアクセントを取る者がなかった。①

好評を得た『青い鳥』は、同じく有楽座において大正十一年文芸協会の後継たる舞台協会によって公演される。ここでは脚本家伊藤松雄を舞台監督として、チルチルには岡田嘉子、ミチルには夏川静江が扮した。昭和十二年の厳寒、映画女優岡田嘉子のソ連亡命は世を驚かせるが、数奇な生涯の自叙伝では、新劇で育った若き日も語られる。女子美術学校に在学した彼女は、有楽座〈子どもの日〉に興味を抱き、浅草常盤座で松井須磨子主演の『サロメ』にも惹かれた。やがて中村吉蔵に師事して演劇を学び、『カルメン』の端役で初舞台を踏む。やがて大正

① 『青い鳥』を見て（『小山内薫全集』第七巻、三五〇―三五五頁。）

十一年舞台協会の有楽座公演における倉田百三作『出家とその弟子』で遊女楓を演じ、好評を得ていた。『青い鳥』への出演から一年後、映画『毒塵』の撮影に参加するさなか、彼女は軽井沢で関東大震災を体験する。①

大震災を復興を祈って水谷竹紫がいち早く結成した第二芸術座では、大正十三年二月から牛込会館において三次の公演を敢行した。提供された演目は、有島武郎作『ドモ又の死』、アンドレーフ作『なぐられる彼奴』、ショオ作『武器と人』などである。これに参加した青山杉作、友田恭助、田村秋子等が、築地小劇場へ移籍したあと、渋谷道玄坂の聚楽座へ六月以降舞台を移し、水谷八重子を主演として『大尉の娘』や『青い鳥』が再演された。②

『青い鳥』が築地小劇場において企画されたのは、第二年〈子どもの日〉においてである。前年のクリスマスには児童劇『そら豆の煮えるまで』に併せて、無言劇と舞踊と器楽演奏も組まれたが、今回は大部で複雑な構成による寓話劇が単独の番組として供された。先回に続き主演に抜擢された十四歳の及川道子は、その後も東京音楽学校で声楽を学び、家庭でも文学書や博物誌の読書を続けていた。自伝で語られる『青い鳥』主役への決意と献身は、築地小劇場をめぐる感動的な秘話のひとつである。

① 岡田嘉子著『悔いなき命を』広済堂、一九七三。三八―四〇、六四―六五、七一―七三頁。

② 秋庭太郎著『日本新劇史』下巻、二九五―二九六頁。
富田博之著『日本児童演劇史』一二一頁。
水谷八重子著『女優一代』四三―四七、二九一頁。

築地小劇場『青い鳥』への出演（及川道子著『いばらの道』）

クリスマスが近付いた頃、築地小劇場ではまた前の年と同じように〈子どもの日〉が催されることになり、上演脚本はどなたにもお馴染みの深い、あのメーテルリンクの『青い鳥』と決まって、私は主役のチルチルの役を振り当てられました。・・・「道ちゃん、あなたのチルチルは成功疑いなしと、みんなが折紙をつけているのだけれど、大丈夫やれるかね。」配役が決まると、和田先生はそう云って、その大役のために私が体を損ねたりはしないかと、半ば気遣いながら、力強く励まして下さるのでした。今度のチルチルは、『そら豆の煮えるまで』の時などより本当に大役です。私の科白ばかりでも一千語句もあるのです。その科白を覚えるだけでも、並み大抵の努力ではありません。そこで小山内先生もいろいろ御心配下さいまして、舞台に馴れるためにいいから、と云って築地の十一月公演『どん底』に出して下さいました。

「道ちゃん、これがあなたの出世役になるかも知れませんよ。今迄にない出来栄えのチルチルをみんなに見せなくては駄目ですよ。」涙ぐましい母の激励。「自分の志した道のためにたおれるということは、人間として一番尊いことかもしれないが、しかし道子、あまり無理をして今からもう体を壊したりしては、かえって自分の将来の芸術を殺してしまうことになるから、注意しないといけないよ。」父の慈愛に満ちた誡め。父母の注意と鞭撻の中に、私は舞台稽古の始まるまでの一週間、電車の中でも寝床の中でも、ほとんど台本を手から離さずに、科白を覚え込むことに努力いたしました。

そして舞台稽古！舞台稽古の始まった頃には、公演の日まで幾日も余すところがありません。演出の小山

内、青山、土方の三先生の指揮の下に、光の山本安英さん、猫の伏見直江さん、それから犬の友田さん、樫の大王の千田さん、時間の汐見さんなどと共に、私たちは毎晩徹夜のお稽古です。血を絞るような、この激しい精進！けれども自分の仕事に大きな意義を自覚しておられる築地の方たちは、この徹夜につぐ徹夜のお稽古にだれ一人として愚痴や不満を抱く人のあるはずもなく、戦場にある義勇兵のような、溢れる歓喜をもって、一日一日と公開の日の近付くに従って、一層熱烈な努力を捧げておられるのでした。・・・

ああしかし、体の弱い私は、この激しい舞台稽古の間に、とうとう感冒に侵されてしまいました。そして明日はいよいよ初日という日になっても、快癒するどころか、病勢は募るばかりで、四十度近い熱が続いていたのです。「このうえは無理を続けて、もし取り返しのつかぬようなことになっては、あなたのお父さんから責任をもってあなたの体を引き受けている私としても申訳がないから、道ちゃん、今度はテルテルを諦めてしばらく休養した方がよくはないかぬ。」小山内先生は、病気を押して稽古を続けている私を、優しくいたわって、出演見合わせを奨めて下さいました。また父母の心配はとても筆には書ききれない程でありました。

皆さんの親切なお言葉には、厚く厚く感謝しながら、けれども私は心の中に固く誓いを立てておりました。「このまま病気が悪くなったとしても、自分の志した道のためにたおれるのは、少しも後悔することがない。いいえ、この固い決心がどうして病気になど負けるものか！病気など征服しなければいけない！そして立派に役を仕遂げて、皆さんの御期待に報いなければならない！」　そして、私は三九度強の病熱を押し切って、初日の舞台に立ちました。

『青い鳥』は第一景樵りの小屋で幕が開きます。チルチルの私とミチルの川村さんのよく寝入っているの

を見て、私たち姉弟のお母さんが部屋から出て行くと間もなく、私たち二人は目を覚しました。「ミチルかい」チルチルの私が云えば、「ええ、にいさん」そう云ってミチルの川村さんが応えます。

そして床の上に起き上がったチルチルの私の体には、どこにも病気の影が見えなくなっていました。病気は私の熱情に負けて、姿を消してしまったのでしょうか、私は病気の代りに、なんとも云えない強い勇気と漲るような力とを感じました。

舞台の上から観客席を見た瞬間に私は、溢れるような満員の、その見物人の中に混って、病気の私を気遣わしそうに見守っておられる、母の慈愛深い視線を感じたのです。ー大勢の観客、しかも薄暗い開幕時間の見物席、その中から母の姿を見出すということは、思いも及ばぬことなのです。それなのに去年の『そら豆の煮えるまで』の時とおなじように、心配そうな母のかおだけが、クッキリ浮かんで見える。ーそれは大きな愛の力のせいでしょうか、それとも私の錯覚が描いた幻であったでしょうか？　「お母さん、どうぞ御心配なさらずに。」心の中で念じると私は、この一週間スープのほかにはなに一つ喉に通すことのできなかった体なのにかかわらず、ひどく爽やかな溌剌とした力の湧くのを覚えていたのです。

そんな心のなかの変化のうちにも、私は舞台の上で演技を続けています。チルチルの私は妖女ベリリウンスのいいつけで、真赤な色の短ズボンと水色の短い上衣という昔話の中の王子のような衣装を着せられて、妹のミチルや親切な光や、犬や猫やパンや砂糖の精と一緒に、不思議な青い鳥を探すために、旅立たねばならないことになります。

そして、第二景、第三景というように、熱心な観客の視線を浴びながら、無事に筋を追うて、全五景を目出度く終えることができました。「チルチル！」「ミチル！」「チルチル！」「ミチル！」〈子どもの日〉の観

客席の半ば以上を占めている少年や少女が、チルチルとミチルの名を呼び立てる潮のような歓声と、激しい拍手の音とが、最後の幕が下ろされた後も、しばらくの間は劇場の屋根を震わすばかりに轟いていました。

こうして『青い鳥』は初日以来成功のうちに第四日を迎えました。そして、その晩も事なく筋の通り進んで、いよいよ最後の第五景森の場面でのこと。ここでは森の中の樹木や鳥獣の精たちが、自分たちの大事な青い鳥を奪われては大変だというので、悪企みをしてチルチルとミチル、私たちの命を亡きものにしようと、残らず皆んなで集っているのです。・・・森の王様の樫に扮しておられる千田是也さんは、森の樹や獣の精に取り巻かれている私たちに向って、さんざん悪口を怒鳴り散らしてから、いよいよ私に打ってかかろうとされたのです。

「あのおいぼれが、大きな杖を振り廻して来るのは、僕に向う気なんだな。」チルチルの私も負けぬ気になって、ポケットのナイフを取って手に持ちました。「ナイフだろうが、斧だろうが。」さう云って樫の大王は、自分を引き止めようとする樹木の精たちを押し除けようとしたとき、高い高い一本歯の足駄をはいている樫の大王の千田さんが、どうした弾みだったのか、思わずドタンと舞台の上に倒れてしまいました。

「あら、大変！」私はビックリして、いま自分がお芝居をしていることを忘れ、思わず側に駈け寄って、一本歯の足駄でなかなか起き上ることのできずにいる千田さんを、助け起してあげました。そして気が付いたときは、もう間に合いません。ー自分を殺そうとした樫の大王が転んだのを見て、チルチルが思わずそれを助け起すというようなことは、『青い鳥』の筋のなかにはありません。私は脚本にもないお芝居をしてしまったのです。

森の場面で思わぬ失策をしてしまったことは、あとで小山内先生からお叱りを受けるものと、私は予期しておりましたが、「道チャンの、いつも情深い性格が、思いがけぬ処に現れて、幕の蔭で見ていた僕は、ハラハラしながらも、しかし非常に愉快な気持だった。」さう云って、小山内先生からお咎めをうける代りに、優しいお言葉を頂いたので、私はかえって顔を赤らめるずにはおられませんでした。

けれども私の病気はなかなかよくなりません。高熱がこう続いては、いつ倒れるないとも限らないので、山本安英さんはいつでも私に代わって、チルチルの役を勤めることができるように、幕が下りると直ぐにその舞台で、土方先生の指導を受けながら、チルチルの役の稽古を始めておられます。・・・こんなに体の弱い私が、築地小劇場の舞台に立っていけたのは、真実の姉も及ばないような山本さんの深い愛情のお陰でした。私が築地にいる間、山本さんはどんなに優しくいたわり導いて下さったことでしょう！

山本さんのことを考えると、私はいまでもひしひしと胸に迫る、感謝の念が湧いてきます。そしてその度毎に『青い鳥』の最後のわかれの場面を想い出します。わかれの場面で、ふたたび樵りの小屋に帰ってきたチルチルの私は、青い鳥を探し廻った旅の間、いつも私たちの保護者であり、案内者であった光の精の山本さんと、お別れをしなければなりません。

「いやだ、いやだ。ねえ、光さん、わたし達といつまでも一緒にいて下さいよ。」光と別れるのが悲しくて、チルチルは光の着物のぶらさがりながら、もう泣き出しそうになっています。「お泣きでないよ。いい子だからね。けれども私は人間の世がおしまいにになるまで、始終そばについていてあげるんだよ。お忘れでないよ。ーそれからお前たちの心に、いい考えや明るい考えの浮ぶときにも、いつも私がお話ししている

ことを忘れないで下さいよ。」

光のお別れの言葉を聞いていたチルチルの私は、本当に悲しくなって、真実の涙が湧いてくりのでした。それは舞台の上の光とチルチルではなくて、山本さんと道子との、心の底からの言葉になってしまうのでした。そして、それからのち本当に山本さんは、私のために光となって、私の進む路を明るく照らし、導いて下さったのでした。

病気を気遣われた私は、とうとう『青い鳥』の公演中、病気を打ち負かして、最後の日まで舞台に立ち通すことができました。そして『青い鳥』は大成功をもって終り、私も小山内先生から御褒美を頂いたので、その小遣いをもって妹や弟たちにお正月の玩具を買ってあげることができました。

この『青い鳥』のチルチルとしての成功が、私を世間的に幾らか名を成させるとともに、私自身にも劇に対する自信を抱かせてくれました。けれども何よりも第一に、この成功で父母を悦ばせることのできたのが、私にとっては一番嬉しいことでありました。①

築地小劇場における『青い鳥』公演はこうして盛況と好評のうちに終了したが、遺された解説や劇評は意外に少ない。築地常連の観客、浅野時一郎の貴重な証言を転記する。

① 及川道子著『いばらの道』八七ー一〇〇頁。

浅野時一郎『青い鳥』（第三九回公演）

衣裳や装置の効果の持つ役割が大きいこの芝居は、築地小劇場のような機構のすぐれた小屋でなくては、完全な上演は望めないと思われていた。新劇協会の上演以来、舞台協会・再興芸術座の上演が、この五年ばかりの間に続いて、築地の開場した去年の六月にも、再興芸術座の『青い鳥』は渋谷道玄坂の小さい小屋で演じられていた。芝居が芝居だから、いつも喜んで迎えられたが、どれも築地の上演には及ぶはずがない。今度はさぞ芸術的な、完璧な演出がみられるだろうと話題にも上っていた。劇場でも十七日間という、初めての長い興行期間を発表していた。

芝居はほんとうに楽しかった。自分だけで楽しんでいるのがもったいなくて、小学生だった妹を連れてまた見に行った。できたらその辺に遊んでいる子供たちをみんな連れていってやりたいくらいだった。去年の〈子供の日〉は肝心の子供のお客が少なかったそうだが、今度は客席にも子供の声があふれていた。幕の前に、チルチルを先に立てて光や犬やパンなどが並ぶと、身近にながめるほうがおもしろいのだろう。隣りにいる妹などは目を輝かせて見ていた。砂糖が指を折ってなめさせたり、光の頭が明るく輝いたり、犬と猫が喧嘩したりするのも、子供には面白いらしく、大人はまた思い出の国の抒情などを楽しんだ。見終わると、青い鳥の寓意は神秘な魔法の杖で、むずかしく私の頭にかぶさってきたが、舞台で動くものを見ている間は、楽しくかわいらしく時の経つのを忘れた。

『青い鳥』ではいつもチルチル役の俳優が話題をさらう。水谷八重子と岡田嘉子が過去ではそのスターだ

った。今度は去年の〈子供の日〉で『そら豆の煮えるまで』のきびきびした少年を演った及川道子が登場した。『虫の生活』に出ていたから、これが三度目である。しかし、出っぱりの大役に心配した小山内薫は、こじき娘という仕出しの役を、『夜の宿』に作って、及川道子の舞台慣れのため出演させたという。このとき十四歳だった。

舞台稽古は何日も徹夜で続いた。元来からだの弱い及川は、とうとう風邪をひいてしまって、初日の前日は四十度近い熱が出た。小山内薫は出演を見合わせるようにすすめたが、及川は押し切って舞台に立った。しかし高熱は依然続くので、山本安英がいつでも代役のできるよう、終演になるとすぐ、チルチルの稽古を始めていた。及川の自伝に載っている話である。

そういう周囲の心配も幸い無駄になって、及川はとうとう最後の日まで舞台を勤めた。私の見た日も元気よく、はきはきとした少年になっていて、病体などとは少しも気がつかなかった。及川の自伝のなかには『青い鳥』の上演の時のこと、築地では山本安英の好意を受けて育ったことが感傷的に書いてあるが、私たちが見ても及川は山本に似た役者だった。断続的に出演を続け、新筑地劇団にも出ていたが、映画へ移って短命な生涯を終えた。水谷八重子も岡田嘉子もチルチル役で名をなした。及川道子の将来にも広い道が開けるだろうと思ったのだが。①

① 「『青い鳥』（第三九回公演）」（浅野時一郎著『私の築地小劇場』一四〇―一四二頁。）